

---

# 連載になるかもしれない、ネタ?

海野 真珠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

連載になるかもしれない、ネタ？

### 【Nコード】

N0612V

### 【作者名】

海野 真珠

### 【あらすじ】

異世界 トリップ ラブ ファンタジー！！ ラブが大切！！  
逆ハー！！ などというメモを発見し、何となく書いてみた、連載になるかもしれない、ネタ。

(前書き)

連載最有力候補ノミネート作品!! (笑)

いや、本気で楽しかった。

鼻孔をくすぐるいい匂いに、くうっとお腹が鳴く。  
ふわふわのパンと、美味しそうなシチュウ。  
ハーブの利いた香ばしい芳香のお肉がなんとも食欲をそそる。

横目にそれらを確認して、そして・・・

金の髪に、純金を彷彿とさせる金の瞳。  
高い鼻梁と形の良い唇。  
ビスクドールのような美形が、目の前に居た。

「…………冷たい…………」  
「…………だろうな。ワインが台無しだ」

お気に入りのワンピースの太腿あたりにシミを作った赤い液体は、  
ワインだったようだ。

豪華絢爛、と言う言葉がこれでもか！というほどピッタリな、だだ  
っ広い部屋の、これまた何人座れるんだ、というぐらい無駄にデカ  
いテーブルの上。  
食欲をそそる美味しそうな芳香立ち込める食事の席に、なぜか私は、  
居た。

それも、テーブルの上。  
ぺたん、と座った形で、太腿にはワインの洗礼。  
唯一の救いは、料理が無事、というコトだろう。

そろっとあたりを見回せば、これまた美形な面々が、驚愕をその顔にのせて、こつちを凝視していた。

「ここは、どこでしょう・・・?」

「ピラカンサの宮殿、その食堂だな」

「ピラカンサ・・・?」

「知らないのか?」

「知りません」

じっと見つめ合う私たち。

目が合った瞬間、なぜだか、目の前の美形の黄金の瞳が驚愕に見開かれた。

ごくり、と固唾を飲む音が回りから聞こえた。

「あ、あの・・・ 取り敢えず、そこから降ろして差し上げては・・・?  
」

恐る恐る、という感じで声をかけてきたのは、ふわふわの茶色の髪の毛、優しい茶金石の瞳の、可愛い男の子。

「あ、ああ・・・」

男の子の言葉に我に返ったのか、目の前の金の男の両手が私の体を抱き上げた。

「あ・・・」

抱き上げられた衝撃で、被っていた帽子が落ちる。

『あーーーーー!!!!!!』  
「つつ?!!」

突然の周囲からの大音量に、びっくりして体がこわばった。

屋敷から内緒で出てきたため、顔を晒さないようにつばの広い帽子を選び、そこに髪を押し込めていた。  
その、押し込めていた髪を指さし、口をパクパクさせているイケメンたち。

な、なんなのおっ?!

厳格な家柄のせいで、18年間染められることなくきた真っ黒な髪。本当は、栗色に染めて、パーマをかけてみたかったがそれも叶わず、ストレートに伸びた腰までのロング。  
無理やり帽子に押し込んでいたせいで少しクセがついているが、そこまで驚かれるほど酷い有様では無いはず。

で、でも、それよりもっつ

「あ、あの・・・ 降ろしてください・・・」

子供のように両脇を持たれたまま、宙ぶらりんはちょっと・・・

「ああ、悪い・・・」

ゆっくりと降ろされ、やっと地に足を着ける。

ホットして見上げれば、このイケメン、ものすごく背が高い!!  
抱き上げられた時もあったけど、こうして見上げてよくわかった。  
私が160ちよつとぐらいだから、多分、200はあると思う。

それで、やっぱり、イケメン。

顔は前述の通り、ビスクドール並み。身体も、モデル並みに均等が取れている。

長い手足としなやかな肢体。それでいて程よく筋肉も付いているのが、抱き上げられた腕の感触でわかった。

「カツコイイ……」

無意識に漏れた言葉は、静まり返った部屋の中、思いの外よく響いた。

「姫!! 僕は?!」

「きゃあっ」

いきなり後ろから肩を捕まれ180度反転させられた。

目の前には、先ほどの可愛い茶金石の男の子……と、同じ顔の、モスグリーンの髪と、エメラルドの瞳の男の子。

すごい色だ……

「姫、僕は?! カツコイイ?!」

じっとその瞳に魅入っていたら、焦れたらしい男の子が口を開いた。

「綺麗・・・」

同じぐらいの身長はこの美少年は、カッコイイというよりも可愛い感じ。

でも、それよりも。

私は、このエメラルドの瞳がとても綺麗だったから、そう告げた。

「綺麗？」

「そう。その瞳。エメラルドみたいで、すごく綺麗」

同じぐらいの身長だから、正面から見つめられる。だから、その美しさが良くわかった。

「えめらるど？」

「知らない？　綺麗な緑色の宝石」

「姫は、それが好き？」

「うん、大好き。私の誕生石なの」

「それも、えめらるど？」

「そう。綺麗でしょう？」

指さされたネックレスに軽く触れて言えば、大きく頷かれた。

四葉のクローバーをかたどったソレは、今年の誕生日プレゼント。毎年、誕生石の装飾品を贈るのが我が家の慣例だ。

「こら、いい加減離れろ」

至近距離に居た緑の子を引っ張ったのは、赤い髪と鮮やかな赤い瞳の、これまた長身の美形。金の人よりも精悍な顔立ちで、身体もどこか武人のような印象を受ける。

それよりも、ルビーの最高級、ピジョン・ブラッドのような深みの



ある鮮やかさに目を奪われる。

「姫、ご無礼を」

赤い人の隣に立つのは、アクアブルーの髪にサファイアの瞳の、中世的な魅力のある美しい人。

多分男の人であるだろうことは、その身長で判断した。赤い人よりも少し低い、それでも200近くある。

冷たい色にも関わらず、透明感のあるサファイアの瞳は惹きこまれそうなほどに美しい。

「まずは落ち着かれよ・・・ 姫のお召し物を汚したままにしておく気か？」

並み居るイケメンの一番後ろから声をかけてきたのは・・・

「大天使様・・・」

うっかり口に出した言葉だけど、高潔な雰囲気醸し出すこの人にはそうとしか表現が出来なかった。

角度によっては多彩な色彩を放つシルバーホワイトの髪と、白い・・・ パールの瞳。

最高級の真珠のような、とろりとした瞳は、まさに至宝。

「だいてんしささま？」

「大天使様。神の御使い。美しくも尊い、天上人・・・」

近づいてきた白い人は、180ぐらい。

少し見上げて告げれば、目を細めて笑った。

「これは奇なことを。神の御使いは姫でしょう」  
「……私……？」

……あれ？

しかし、何でさっきから、名前を呼ばれてるんだろ……？  
私、まだ名乗ってない、よね……？

(後書き)

黒髪黒目は、統べる者の象徴で。

『全能の姫』とか呼ばれちゃって。

このイケメンたち、実は精霊の長だったりして。

なんていう設定もあったりして。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0612v/>

---

連載になるかもしれない、ネタ？

2011年7月23日12時00分発行